

部落問題文芸作品選集

第30卷

鳥追阿松海上新話
穢多の大望・鋸びき
おこそ頭布・他三編

世界文庫版

部落問題文芸作品選集 第三十卷

定價は箱帯に表示

昭和五一年四月二十八日発行

発行者 松 本 富 夫

発行所 株式会社 世界文庫

東京都目黒区洗足二一二―一五

電話〇三(七一六)六一五一(代表)
(七一三)九二四四

振替 東京 七八四九八番 千一五二

落丁 乱丁本はお取替えます。

目次

- | | |
|-------------------|-----|
| 一、鳥追阿松海上新話 | 一 |
| 二、穢多の大望 | 八一 |
| 三、鋸びき | 一〇六 |
| 四、おこそ頭巾 | 一二三 |
| 五、五寸釘昔話 | 一六七 |
| 六、佐竹の家老東政義及び東猛虎兄弟 | 二三三 |
| 七、義傑車丹波守 | 二三九 |

鳥追阿松海上新話初編序

我假名讀新聞第五百四十號、客歲十二月十日を以て、始めて雜報欄内に記載せし鳥追阿松の傳は、間々本年一月十日第五百六十二號に到り、嗣出すること十四回、未だ結局に及ばざるも、僥倖にして千町萬町の衆目に觸れ、喝采の聲價を得たる、操孤者の歡喜の餘りに、思はず筆を走たるなり、然りと雖も春霞、三筋を繋ぐ長物語は、頗る新紙の本意に違へば、其概略を次號に掲げ、大團圓となさんと欲すを、錦榮堂の主人遺憾として、乞ふて其首尾全くせんとす原由は遙かに過去し、明治元年の春よりして、同く十年の冬に止る、溫故知新の大實錄、題して海上新話と號け、茲に三絃の緒を解くと云ふ。

明治十一年 第一月

假名垣魯文記



鳥追阿松海上新話初編

假名垣魯文閣

久保田彦作著

○第一回

梅が香や乞食の家も覗かるゝと、晋子の吟の古き稱へもあらたまる代の春立つ頃、東京は未だ江戸と呼び、木挽町の采女が原に、埴生の孤屋の板庇、月洩る軒の破家に、親子みたりの非人あり、其本夫定五郎は日毎に邊り近き尾張町なる、布袋屋といへる呉服店の曲り角に、履物直しの露店を張り、妻のお千代(二十)と一女阿松は、春は鳥追平生は、女太夫の笠深く、包めど匂ふ島田醬、二十の上を二ツ三ツ、超せど花香は市中に高く、大店向や勤番長屋の窓下にて、鶴賀の節も仇めきて、玉を欺く母娘、其頃世上に小屋桑三と、人も門より呼子鳥、頃しも慶應末の事にて、維新の際ゆる諸藩の兵隊、大名小路に屯營して、まだ血腥さき時なれば、女太夫を窓下に近付け

て、種々の唄など謡はせ、浮た調子に阿松母子は、日に二圓の稼ぎはかゝさず、又なき事とおもひしに、果報は寝ても待つべきものにや、廓の内の或る邸に屯集する徴兵隊に、濱田正司といふ者ありしが、深くも此阿松を戀慕ひ、傳手を求めて采女が原の、定五郎が小家へ尋ね行き、金にあかして随はせ、竟にわりなき中とはなれど、阿松は顔に似もやらず、慾深き生れといひ、母のお千代も娘が色香に迷ひし濱田が意に付入り、種々の手術で金三百圓餘を騙し取りしが、正司は貯へ多くもあらぬ身なれば、阿松の爲に衣類調度を遣ひ捨て、此事早くも隊長に聞えしかば、其頃禁足を申し付られたりと云ふ。

扱も阿松は心に染まぬ、濱田正司が通ふ道さへ、戸絶の橋に名も因ある、橋場の里の汐入堤に同じ非人で大坂吉といふ者あり、阿松は兼て同氣もとむる破落戸ゆゑ、いつしか人目の關越えて、互ひに父母の目を忍び、度々密會せし事を、母のお千代は悟りしが、素より色もて俗業の、助けと我子に善からぬ道を、承知でさせし事ゆゑか、あながちに口へは出さず、見て見ぬ振ぞうたてけり。爰に淺草並木町に松屋といふ呉服店あり、見世の番頭忠藏は、元大阪の出生にて、物堅き



郭の内
或郎

共隊
濱田

止司
の苦あり

深
此阿松

急慕
ひ侍

と求
めく采女

が糸の定五郎が小家へ尋ね

乃さ金わあ へ 乃さ金わあ

度々遊會せと母の
お年代の悟りて素より
色は俗業の助けと我

ふお

乃と

兼知で

乃と

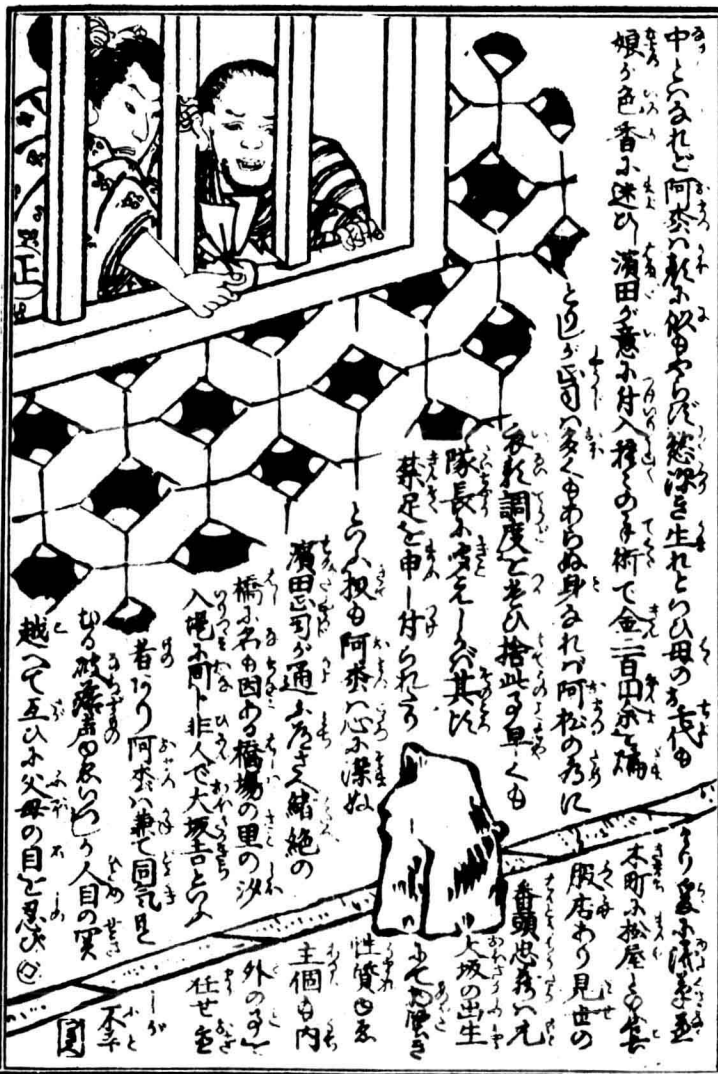
乃と

乃と

乃と

あふふふ口へ出さば

乃を見ぬ振ぞとて



中といふれど阿茶ハ叔父似やうに然深き生れといひ母の古代も
娘の色香ふ迷ひ濱田が意ふ付入移るの術で金三百両余を騙

より金ふ流すも
本町ふ松屋との客
服店あり見世の

と直ぐ可い多くあられぬ身なれば阿松のあに
後れ調度とをひ捨此より早くも

番頭忠義ハ元
大坂の出生
ふてお屋さ

隊長小次郎一公其以
禁足を申し付られり

性質のま
主個の内
外のす
仕せを

との叔父阿茶ハ心ふ深ぬ

濱田が通ふ乃さ緒絶の

橋ふ名由因の橋場の里の汐

入電ふ町ト非人で大坂吉とらふ

者りり阿茶ハ兼て同気見

むる破席席のあらしう人目の実

越て互ひ父母の目と思ひ

不
団

性質ゆゑ主個も内外の事を任せ置しが、不斗忠藏は日々阿松が門へ来て調子に乗せる三筋の縁に、笠の内さへ覗かるゝ、仇の姿に見惚けん、寐ても覺ても忘れ兼、思ひの丈を文に認め、或日阿松が袂へ入れしを、何事ならんと開き見しに、一夜の情といはゞえに、眞實見えし文體に、阿松は例の金ゆゑなら、誓へ醜き男でも、否とは言はぬ渡りに船、早速返事を見世先より投込んで知らせしかば、忠藏の悦び言はん方なく、今宵密に橋場の小屋へ、忍んで來よと夕まぐれ、急ぐ折しもあれ主個は忠藏を居間に呼よせ、金二百圓を渡して扱云ふやう、此金は橋町の何某へ、仕切に渡す金なれば、五苦勞ながら持參してと、意を置かぬ主個の頼みに、忠藏はうけがひて二百圓を財布に入れ、我家の門を立出しが、心も空の浮足に、入谷田甫を横に見て、其日の夕暮間近き頃或家に忍び行、首尾は如何と内に入れば、阿松はかねて姿を粧ひ、酒肴など支度して、いとしめやかに饗應ければ、忠藏は有頂天、數々廻る盃に、酔も醺の廓近く、總泉寺の松風颯々と夜は五更ともおぼしければ、寐よとの鐘の筵屏風、破れ布團に枕を並べ、怪しき夢の仇むすび、後の憂とぞ知られける。忠藏は非人小屋に始めて泊りし事といひ、若や人に悟られたら、我身の恥と

頼には眠れず、阿松は宵にすごせし酒に、スヤ／＼寐入る眞夜中ごろ、表の締りも勝手知りたる我家の雨屏、足で蹴かへし櫓先に、足踏み掛けし大坂吉は、出刃庖丁を口に嚙へ、突然屏風を取退けて、うぬ密夫め四ツにする覺悟をしろと忠藏阿松が、襟髪揃んで左右に引据ゑ、庖丁逆手に胸元へ、既に刺さんとする手に縋り、涙と共に聲ふるはし、今更お前の目を掠め、忠藏さんと不義をしたのは、譬へ此儘殺されても、言解くことは無い事ながら、卑しい産れにたゞ一度、素人衆と枕を並べ、せめて濁らぬ人さんと、道ならねども棲重ね、お前は平常賭博に家業もせず、其日の煙りも立て兼て、手馴し業の新内ぶし、人様のお門へ立ち一錢二錢の手の内で、漸々暮す瘦世帯、同じ五體も満足な人間に産れても、穢多よ乞食と卑しめられ、殊に邪見のお前には、とうから愛相が盡たゆゑ、竟知りながら忠藏さんと、斯いふ中も命がけ、罪は私と體を突付け、サアすつばりと殺してと、阿松が覺悟に流石の吉も、張切る腕もひるみしか、暫し詞もなかりける。折から後ろの荒壁の崩れより、思ひがけなき母のお千代が、始終を聞いて吉に向ひ、道理を迫て和めしかば、たゞ忙然と忠藏は、夢に夢見し心地にて、齒の根もあはず片隅に縋り居て、お千代

に此場の扱ひをと、手を合して頼む計り、外に詞も内證は、親子二人の水入らず、心得顔に大坂吉を小影に招きいろ／＼に、論すも虚か實情は、人の命の山吹色、手切の金と轉びしに、お千代は出もせぬ涙を浮べ、忠藏に百圓の金を出して命乞ひは、安いものだと胸ぐらに、退引させぬ板庇、月さし登る主個より、預かりし金ながら命には換へ難しと、正直一途の忠藏なれば、お千代が詞のまに／＼金百圓を手渡しして、虎の尾踏み毒蛇の口を廻れし心地と裏田甫、抜て飛び出す秋雨に、びつしより濡れし羽拔鳥、塹を放れて逃げきけり。

跡に三人傍を見まはし「吉さん首尾は上出来と、阿松がいへば大坂吉も庖丁其處へ投出し」元かゝ仕組んだ刃物三昧、既ですることに血を見ねば、ならぬ處へ後から、留めてくれたは思ふ壺、命替りは二分判で、耳を揃へた此百圓と、いふに傍からお千代はほゝ笑み「斯いふ時こそ一廉の、役に使つて腕を見やうと、思つて日頃親の目を、忍んで遠から乳繰合も、見て見ぬ振は親の慈悲、首尾よくいつた百圓は、入谷田甫の二ツ分、モウ觀音の明七ツ、大層寒さも吹晒す、風を凌ぐは茶碗の酒と、三人廻る逆もどし、順には行かぬ身の果は、後にぞ思ひ白玉の、露も氷りて霜とな

り、夜明近くぞなりにける。

此後阿松大坂吉は、善からぬ事のみ色にことよせ、種々惡計を廻らして、先に濱田正司といひ、今又松屋の忠藏を、密夫なりといひなして、金百圓を騙り取りし事、早くも其筋へ聴えしかば、日ならず彼等の身に及ばんと、惡き道には賢きお千代、娘阿松と大坂吉の、二人に一度姿を隠させ、一二年の其内は、吉が故郷の大坂へ、密かに身を寄せ人知れず、世間の口碑を避るに如かずと、親子が膝を突合せ、鼎になりて身の上を、案じるは猶親心、假染ながら浪花津に、さくや今宵が別れぞと、かたみに送る旅路の門出、此時は是れ明治二年如月の初旬なり。

軒端の梅が香東風に吹き送りと、何方も春の賑はしく、殊に其頃東京と、久しき江戸を更ためられ、百事維新の御新政に、民の困苦を救はせられ、いと有難き御代ながら、廣き故郷を惡事の爲に、世を狭めたる大坂吉と、彼の鳥追の阿松の二人は、其身の疊りに鳥が鳴く、東都を跡に難波津へ、旅粧はひもそこくに、松屋の手代忠藏より、奪ひし金を路用として、密に古巢を抜け出し、まづ品川を出外れて、身の廻りをも調べやと、古半纏に古布子、縞も三筋の命毛は、取

結びたる三尺おび、人目を包む手拭ひに、顔は隠せど身にあふるゝ、惡漢毒婦が首途は、千里の藪に猛虎を放す、彼の謠も斯くやらん、其日の黄昏燈ともし頃に、品川驛の裏手なる、東海禪寺の境内にて、兼て知己の非人仲間、安五郎といふ者あり、阿松が父定五郎とは竹馬の友とて義兄弟の、因みを結びし程なれば、二人は爰に今宵をあかし、旅の用意も調べやと、いと頼母しく思ひしや、大坂吉は平常より安次郎が酒を好めば、僅ばかりの手土産は、松の葉越しの笹ならで、備前徳利の樽酒に、身のひと包む竹の皮、煮染ものなぞ買とゝのへて安次郎の門口より、細目にあけて内を伺ひ傍りを見廻し二人は椽に上りしに、安次郎も立出て、珍らしや吉藏どのに采女が原の娘御なるかと、主人振さへ底氣味悪く、小聲になりて扱ふやう、兼て話しもお聞であらうが、仲間同士の賭博に、負債も嵩みて詮方なく、阿松を玉にといふを引とり、さう打明ていふ時は、私ばかりが敵役、女賢しく牛賣損ふたとへもあれど母さんの、言付ゆゑに仇枕と、有りし事ども物語り、ひと先吉が故郷へ、身を落つけんと逐一に、安次郎に話せしを、一々聞いて打うなづき「互ひに心打解て、悪い事なら隠し合ふが、日頃のよしみは此時ぞと、人の心の奥の間

へと、主個は先に案内して、入るや月洩る板庇、安次郎がこゝろの内は、如何なることを仕出すか、そは次の巻に解分べし。

○第二回

再説 東海寺の暮六ツ袖が浦の波に響き、歩行新宿の妓樓に酔客のうかれ拍子、弾く三絃の音もさえて、風吹き送る騒ぎ唄を、佳肴珍味と饒別の、酒くみかはす樽酒を、徳利にうつす熱燗に廻す茶碗の蠟豆腐、元より阿松も吉藏も、飲む口ゆゑに酔もまはり、身の罪科も打忘れ、阿松は手馴し三絃の、調子も浮いた三下り、吉はそのまゝ手枕に、數へる鐘も七つ八つ、五更に近き臙月、流石に阿松も生れ故郷を今宵旅路へ踏出さば、いつ歸り來ん高砂の、松に甲斐なき日影の身、せめて今夜は此家へと、いふに主個の安次郎も、傍より泊れと進むるに、渡りに船の友綱に、縄つておろす錠縄、酒も程よく飲盡し、破れて居れど隔ての襖、夜るの物さへ薄暗き、二人は臥房に入りける。

跡をとつくと見定めて、安次郎は門口の締りを堅く鎖しつゝ打うなづきて、僥倖よしと片頬に

笑み、表の方へ忍び行く、程もあらせず月影も、さやけき海に鐘さえて、星もきら／＼漁舟火に
 紛ふ夜中の折こそあれ、兼て此家の安次郎が取締所の分營へ、密に注進なしたるゆゑ、阿松吉藏
 討手の捕丁、手に／＼得物携へて、裏表より臥房に込み入り、並べし枕の二人が襟髪引立てるに
 吉は南無三捕方なるかと、布團を手早く匆退けて、雨戸を蹴明けて庭の方へ、やにはに逃んと駈
 出すに、兵隊は突棒刺叉などにて吉を目がけて打かゝり、それ曲者を逃すなど、續いて庭に飛下
 りて、繁る木の間の月影に、垣を小楯の一横一下、忽ち吉は利腕をしたゝかに打据られ、なにか
 は以て堪ふべき、その儘其處にひれ伏せば、それといふ間に折かさなり、忽ち繩をぐる／＼まき
 付け、なんなく縛に就たるが、母家の方には鳥追阿松が行燈の火も打消して、家内は眞の闇試合
 殊に女の事なれば、油斷といふには非されど、皆庭先の吉が方へ、一同向ひし跡なれば、是れ幸
 ひと身支度して、壁により添ひ脊戸口より、人知れず逃れ出で厠に沿ひて植込みの、葉蘭も繁る
 鉢前に蹲まり居るに今までは、晴し空さへ雲足早く、さやけき月をうち覆ひ、隈なく見えし庭も
 せも、暗の梅が香匂ふらん、阿松は是れに力を得て、猶うづくまり居たりしかば、討手の兵隊

高手小手に繩をかけたる大坂吉を、かたへの柱に結へ置き、阿松が所在を隅々まで、残らず捜せど影だに見えねば、扱は彼は風を喰ひ表の方へ逃れしかと、二三名の兵隊は等しく庭に下り立て、彼の突棒にて植込みの、樹の間を突かれて阿松は堪らず、身をひるがへして逃んとするに、木の葉は揺れて塙の鳥の羽音の如くさはくと、いふに此方は得たりと思ひ、猶突かゝる手練の棒、さゝへる阿松も一生懸命、下を潜つて彼處にあらはれ、或ひは左右に身を避けて、しばしは手先を退れしが、生憎月は雲晴れて白晝に等しき月夜さし、阿松が姿あさやかに、見ゆれば兵隊附いて、既に危き其中にも、元より大膽不敵の毒婦、自然に備はる早業に、するどき圍みの其中を飛鳥の如く逃廻り、後ろにむづと組付くを振拂つて傍へなる、柳の枝に飛付いて、身をおどらして幹を傳ひ、垣より表に飛下りんと、しだれし柳の糸筋は、風にもまるゝ風情なりしが、兵隊衆は詰よつて、阿松が裳裾に取付かんと、する手を拂ひて枝より枝へ、自由自在によち登るは、さながら真猿の梢を渡るにさも似たり、折から又もや雲出で、照る日影を隠しければ、阿松は爰ぞと隔てし垣の枝にその身を楯として、取付く幹を手放せば、身も軽々と裏手の畔道、運よくも